



どんぐり

No. 56



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO

(Nature Education Center)

自然学校ってなあに？



兵庫県立南但馬自然学校

校長 森 本 雅 樹

電波望遠鏡を作るとか、その研究をするとかは、一般社会から関心、理解なんて持つてもらえそうもない分野です。そんな分野での技術開発、研究者を集める…等の必要性から、みんなに知ってもらうため、機会あるごとに雑誌新聞はもちろんテレビや講演、子ども相手のイベントまでお付き合いを心掛けてきました。

それがある日、「自然学校」なんて、全く違う畑に迷い込んでしまいました。今から十年と少し前です。

「大阪で野外教育学会全国大会が開かれるので、基調講演をお願いします」と、講演依頼がありました。兵庫県立南但馬自然学校ができて5年余り、小学校5年生、県下全校、学校ぐる

みで5泊6日、全国でも全く新しい試み、ということでは兵庫県は知られていましたので、「教育」が進出すべきこの新しい方向に、みんなの眼を向けてもらうという点では同じです。当然、題材は、兵庫県の自然学校になります。

講演の中で、南但馬自然学校の人気プログラム「自然観察ビンゴ」(自然観察ビンゴとは、施設内をぐるっと回りながら、五感を使ってたくさん自然物を見つけないながらビンゴを目指す活動です)を真



似て、「九九のお山の自然観察」というのを見せました。ご存知「九九の表」を配って、そこで見つけた「おもしろいこと」「疑問」を拾ってきてみんなに報告して議論するのです。「右上と左下が同じだ」には、「 3×5 と 5×3 が同じということだ」で解決します。「九の段の数字の並びがおもしろい(一の位の数字が、9、8、7…と減り、十の位の数字が、1、2、3…と増えていく)」、「これは数という問題でなく十進法の問題だ」は、参加者である数学の先生の言葉です。

「九九のお山の自然観察」は、その他にも「縄文時代に九九はあったかな?」、「割り算も必要だったのでは」、「ラテン系は12まで、インドでは20まで教えるそうだ」、「チンパンジーのアイちゃんはどこまでできるかな?」と、様々な疑問が膨らんでいきます。とにかく、表を覚えて、

計算問題、応用問題という、いわゆる「算数」とは全く違った展開になりました。「数」というものが、どんな意味を持っているかにまで広がっていったのです。

どこにでもある自然、それは算数で扱っている九九かもしれない。その中に飛び込んで行く、型にはまったものでなく、その中で生きる力が試される「学習」ができたというのではないかなど、考えてもらえたかもしれません。

表紙の写真

オオルリ

オオルリは春に日本などで繁殖をするため、南方の国からやってくる渡り鳥です。まずオスが先に繁殖地へ渡って縄張りを作り、その後、到着したメスと番いになります。

オスは頭から背中にかけて青色で、白いお腹もよく目立ちます。また、鳴き声も美しくウグイス、コマドリと合わせて「日本三鳴鳥」と称され、昔から詩歌の題材に用いられるなど馴染み深い野鳥です。

自然学校出前講座の活用を！



兵庫県立南但馬自然学校
主任指導主事兼指導課長

高見 英明

《はじめに》

兵庫県教育委員会では、県民の参画と協同のもと、小学校の「環境体験事業」や「自然学校」、中学校の「トライやる・ウィーク」、高等学校の「高校生地域貢献事業」「トライやる・ウィーク」、特別支援学校の「YU・らいふ・サポート事業」等、発達の段階を踏まえ体験活動を体系的に実施する兵庫型体験教育を推進しています。

南但馬自然学校は、自然学校の中核施設であり、自然学校等の場の提供、調査・研究、指導者研修、情報提供などの事業を行っています。中でも、自然学校等、「生きる力をはぐくむ体験活動」の支援を行うというねらいのもと、毎年、自然学校出前講座（以下、「出前講座」という。）を実施し、小学校や教育委員会等の要請があれば要請側の経費負担なしで、子どもたちへの出前授業や研修等の講師として出向いています。

《出前講座の内容》

出前講座は、自然学校に関すること（自然学校の趣旨説明・事前相談・事前学習・保護者説明会・事後学習・事後相談）、プログラムデザインに関すること、体験学習法に関すること、自然とふれあう手立てに関すること、人とふれあう手立てに関する

ことの内容で実施しています。

出前講座の依頼が多いのは、本校の利用校から、子どもたちへの事前学習としての出前授業と保護者説明会に同席しての説明です。午前中に

出前授業、午後からは保護者説明会といった形もあります。

出前授業では自然学校で実施する活動にかかるロープワーク実習、火おこし実習などの事前学習の依頼が多く、いつ出かけても子どもたちは目を輝かせ興味津々で取り組んでくれます。また、保護者説明会では、施設や活動の様子を写真で示しながら本校職員が説明するので、保護者も安心されるようです。出前講座に出向いた学校の子どもたちとは、顔見知りになってい

るので、一週間良好な関係で過ごせるのも大きな特徴です。

また、教員対象の研修会の講師として声をかけていただくこともあります。その際には、自然学校や体験活動の意義、プログラムデザイン等の話をしています。



《先生方の不安の解消と出前講座》

自然学校を受け入れながら最近感じることはありません。それは、自然体験活動の指導に対して不安のある先生が少なからずいらっしゃるということです。

例えば、仲間づくりや達成感をテーマとした、本校での活動の一つに「隠れ家づくり」があります。

「隠れ家づくり」では基本的なロープワークが重要ですが、その指導に不安のある先生を対象として指導主事が、うまく隠れ家をつくるポイントの話をしたり、ロープワーク実習を行ったりしています。この効果は抜群で、先生方は自然学校の「隠れ家づくり」の時には、自信を持って子どもたちの指導に当たられています。

《安全管理と出前講座》

自然学校を実施する場合、第一に考えなければならないのが安全管理です。

安全安心な自然学校にするために、本校では、出前講座の時や下見の時に、安全に活動するための留意点についても話をしています。保健担当の指導主事が後のページで関連してふれています。特に野外炊事、隠れ家づくり、サイクリングでは、指導主事が先生や子どもたちに活動前に安全指導を行っています。

《プログラムデザインと出前講座》

一学期の本校の利用校で、活動後の振り返りに力を入れていた学校がありました。活動中や活動後に、先生方がねらいに基づいた声かけや適切な振り返りの発問をすることで、子どもたちが逞しく変容した姿を目のあたりにする機会に恵まれたのです。

そして、改めて、自己有用感、達成感、連帯感等を味わえるような言葉掛けを心がけたいものだと思えました。また、どんな振り返りをするのかを考えることで、活動のねらいも明確になってくるのではないかと感じました。

こういった活動中の指導や振り返りを含めたプログラムデザインのあり方等についても、本校の指導主事が助言させていただきます。

《自然学校出前講座の活用を是非！》

本校の利用校に限らず、県下の公立小学校や教育委員会であれば日程的に可能な限り、出前講座の依頼をお受けします。

申し込みについては、本校指導課まで、まずはお電話ください。

日程調整後、「自然学校出前講座申請書」に必要事項を記入の上、実施日の一か月前までに本校へ直接申し込みください。「自然学校出前講座申請書」は南但馬自然学校のホームページからダウンロードできます。

申し込みをお待ちしています。

「自然学校」の

今後の充実に向けて

兵庫県教育委員会事務局義務教育課

〈はじめに〉

本県では、本事業が二十年目を迎えた平成十九年度に、「自然学校評価検証委員会」を設置し、その提言をもとに今後の自然学校の充実を図るための「6つの方策」を示し、一層の充実に向けた取組を推進している。

方策1 自然学校と他の教育活動との関連を図る取組の充実

方策2 事前・事後の学習活動の一層の充実

方策3 学校では得難い体験活動プログラムの一層の充実

方策4 社会性や自立性等を育むための集団活動の充実

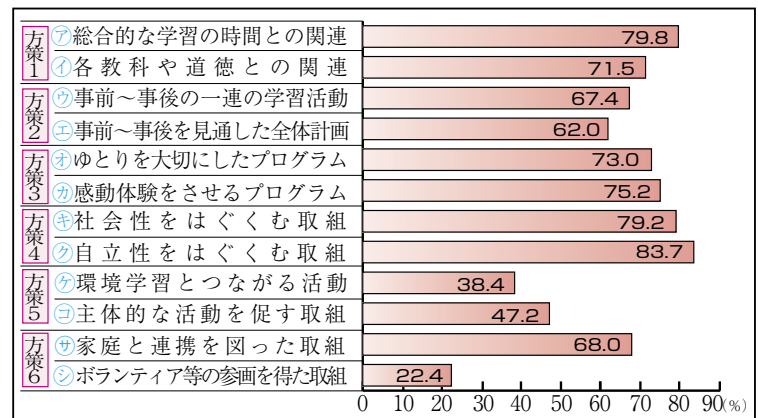
方策5 子どもの成長過程を踏まえた体験活動の充実

方策6 家庭や地域との一層の連携を図る取組の充実

〈「6つの方策」を観点とした推進状況〉

昨年度末、この「6つの方策」に関する実施状況について、県内のすべての小学校を対象に調査を行った。その結果をまとめたものが次のグラフである。

この調査結果から、取組の成果や課題について、以下にまとめる。



〈「6つの方策」を観点とした推進状況〉：「平成21年度小学校における体験活動実践状況調査」より

取組の成果について

方策1・3・4については、7割以上の学校がその充実に向けた取組を進めている。

例えば、自然の中で仲間とともに夜空を見上げ、星々の美しさや壮大さ等を実感した心の動きを理科の学習意欲につながるなど、教科と関連させる活動や、早朝に起床して登山を行い、雲海に沈む月と日の出を同時に眺めるといった感動体験を重視した活動が、多くの学校で取り組まれている。

特に、方策4の割合は高く、具体的な取組として、生活のルールや活動の問題点、児童相互のトラブル等

について、児童がじっくりと時間をかけて話し合い、解決したり、必要に応じて修正したりする時間や場の設定、ホームシックを乗り越えたり、失敗しながらも仲間と一緒にチャレンジしたりする経験や、多くの児童がリーダーを経験できる活動等、児童の社会性や自立性をはぐくむ活動が重視されていることがわかる。こうした取組のためには、ゆとりをもったプログラムが大切である。ゆとりの中で、児童が全体で対象に働きかけ、かわることは、児童の心を動かし、新たな気付きや見方の広がりをもたらすと考えられる。児童の所属感や連帯感、自分への自信や人間関係力を高める上でも、ゆとりをもって活動に取り組むことが大切であり、今後も引き続き集団での学びを重視した取組の充実が求められるところである。

課題と改善策について

今後の課題としては、「環境学習とつながる活動」「主体的な活動を促す取組」「ボランティア等の参画を得た取組」のさらなる充実が求められる。

例えば、環境学習との関連については、児童にとって身近な川の水質や水中生物等の調査をもとに、自然学校での活動場所周辺の川と比較する活動や、里山保全のため、地域の方の取組を聞いたり、ともに植樹活動を行ったりするなどの取組が考えられる。

また、児童の主体的な活動を促す取組としては、計画段階から児童がプログラム作成に参画したり、現地での見学やインタビュー等の機会に向けて、事前に知りたいことや疑問に思うことを絞り込んで児童が自主

的に課題をつくったりする取組も考えられる。こうした取組を充実させるためには、例えば、自然学校を「体験活動プラス探求型」の学習の場ととらえ、テーマ性のある自然学校を構想し、「事前・事後体験活動」の一層の充実を図りながら、地域の特性や本物に触れさせるため、特定の分野に専門性の高い地域のボランティア等の支援を得ながら活動を展開することも考えられる。

〈おわりに〉

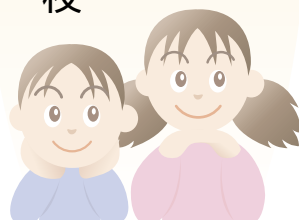
国が平成二十一年十二月に公表した『農山漁村での長期宿泊体験による教育効果について』では、長期宿泊体験による教育効果として、児童の協調性や自立性、社会性等の高まりを挙げている。また、その変化は、3泊目以降に顕著に現れることを指摘し、「3泊目以降になると自分たちの力で生活せざるを得ない場面が出てくるのが想定され、効果に大きな違いが出てきた可能性がある」としている。

「子どもが確かに変わった」と感じたその場その時を逃さず、適切に評価しつつ、集団としての達成感や達成感を共有していくことは、児童の自己有用感を高めるとともに、児童のその後の成長に大きく寄与するものである。

今後、各学校においては、児童の健康と安全に十分配慮し、事故防止のために万全の計画を立てるとともに、利用施設等の関係機関と連携し、不測の事態に対して適切に対応できる協同指導体制を確立しながら「6つの方策」を踏まえた特色ある取組を推進していくことが重要である。

特色ある取組

相生市立若狭野小学校の自然学校



本校での自然学校が、4月末からスタートしました。12月上旬までに、53グループ63校（利用延べ人数約23,900人）が、本校で様々な活動を展開します。

相生市立若狭野小学校は、5月17日から五日間、自然のなかで自分を見つめ、生きる力をつけよう——自立・挑戦・協力をテーマに、そのテーマにそったプログラムを展開する自然学校に取り組みました。その中で、「自立」と「挑戦」について、特色ある取組を紹介します。

1 自立（自分の生活、または自分自身を見つめ直し、食事について自分の力でやってみることを通して、自立について考えよう。）

(1) 一人寝テント泊

希望者による一人寝テント泊を二日目、三日目の活動として計画していました。生活棟よりも、「住」の条件を厳しいものにすることで、友だちに頼るのではなく、自立心を培わせようとする取組です。雨天により、設営場所をうりぼうの森から大屋根広場に變更し、また、泊数も二日目の一泊

となりました。子どもたちは、寂しさをこらえながら動物の鳴き声が響き渡る夜を過ごすという貴重な体験をしました。



一人寝テント泊

(2) 野外炊事での昼食弁当づくり

三日目、四日目の朝は、昼食の弁当づくりから始まります。おかずは、「ウインナー」「ブロッコリー」「ミニトマト」「枝豆」「さつまいも」です。自分が作った弁当は、家や食堂で作ってもらっている弁当ほどの見栄えではありませんが、個性豊かでこれからの活動に向けてのエネルギーを与えてくれます。各自の弁当には、「食

生活の見直し」「保護者に対する感謝」そして「自分で弁当を作った自信」というおかげで、ぎっしりと詰まっていました。



弁当づくり

2 挑戦（各自課題を決め、失敗を恐れず、自分で考えチャレンジしよう。）

・選択プログラム

三日目・四日目の活動は、朝来山登山・ハンモックづくり（クラフト）・隠れ家づくり・ヒメハナ公園サイクリングの活動から一つを選ぶ選択プログラムです。それぞれ、別々の活動を選択している子どもがいたら、二日間同じ活動を選択している子どももいます。小雨にもかかわらず水晶を探しに朝来山登山に臨んだグループ、自分で編んだハンモックで寝心地を楽しんだグループ、夢の空間となる遊び場（隠れ家）を作ったグループ、さわやかな風をこちよく受けマウンテンバイクにまたがりサイクリングを楽しんだグループな

ど、選択プログラムを実施すること子どもたちの興味関心をさらに高め、それぞれが一番の笑顔でした。



ハンモック

これらの特色ある活動を通して、子どもたちは日毎に成長していきました。子どもたち自身の中でも、その変化に気づいていた子もあつたようです。充実した自然学校が送れたのは、自然学校で子どもたちに何かを学ばせたいという先生方の強い思いがあり、危険を防ぐための職員の配置等、子どもたちの活動を支える学校の支援体制が整っていたからです。

他の学校でも、様々な工夫を凝らした活動が展開されています。本校のホームページでは、利用校の活動を掲載していますので、一度ご覧下さい。

（文責 兵庫県立南但馬自然学校
主任指導主事 北條 勝也）

自然学校と 安全指導

兵庫県立南但馬自然学校

指導主事

林 潤子



○はじめに

自然学校期間中の様々な活動において、事故やケガのリスクを軽減することは、とても重要なことです。適切な指導と対応によつては、事故やケガを回避、もしくは軽減することができます。これをリスクマネジメントといいます。

本来、リスク・マネジメントとは各種の危険による不測の損害を最小の費用で効果的に処理するための経営管理手法ですが、自然学校においても、リスクマネジメントの考え方を取り入れ、ケガを未然に防ぐことが必要です。

そのためには、活動上の危険な因子をしっかり把握し、それを可能な限り排除していくことが大切になります。

○安全に対する視点を明確に

平成19・20年度の南但馬自然学校の調査研究委員会では、「クラフト」「野外炊事」「登山」「隠れ家づくり」の4つの活動を取り上げ、活動中に「ヒヤリハット体験」（危険を感じた状況）の「原因」と「その原因がど

こから来ているのか」を明らかにしました。そして、それを基に活動ごとにチェック表を作成しました。

指導者はそれらを知ること、安全に対する視点を明確にでき、ケガをしないようにするためには、どのように指導していけばいいのかを事前に話し合うことができます。また活動中にもチェックするポイントが明確になります。さらに万が一ケガをした場合でも、早期対応が可能となり、またその原因究明にもつながります。

○クラフトでは

「クラフト」時のヒヤリハット体験は、工具使用時に多くみられます。ヒヤリハット体験に至った原因を見ると、「軍手の未装着」、「児童の不注意」、「工具の使い方」の説明不足、「指導する人員不足」等の順であげられます。

クラフトでの安全管理は、工具の使い方を十分指導することが大切です。

○野外炊事では

「野外炊事」時のヒヤリハット体

験は、「かまど周辺での活動」（火おこしを行っている時）「包丁の使用時」、「飯ごうや鍋の移動運搬中」に多くみられます。

児童の不注意が、その原因のひとつです。しかし、指導者が火おこしや刃物の危険性についての適切な指導を行うことでケガの防止につなげることができます。また鍋や飯ごうを運ぶとき、転倒を防ぐために周りを片付けることや、ぬかるんでいる時には地面が滑りやすいことに対する注意喚起を行うことも必要です。

○登山では

「登山」時のヒヤリハット体験は、「下山時」「頂上滞在時」に多くみられます。下山中に走らない、地面のぬかるみの状況に注意を払う、頂上では羽目を外すことなく注意深い行動をとる等、いつも安全を意識して指導することが大切です。

○隠れ家づくりでは

「隠れ家づくり」時のヒヤリハット体験は、「遊んでいる時」、「製作の時」に多くみられます。隠れ家づくりの特徴として、木材を組み上げて高さのあるものを作ることが多いことから、できあがった隠れ家から転落することがケガにつながる一番のケースと予想されます。また、隠れ家づくりに適した材料が選ばれていない、十分な強度を持った隠れ家ができていない等もケガの原因と考

えられ、児童・指導者ともに隠れ家づくりの中の危険因子を発見・把握できていないことが多いようです。

隠れ家づくりを指導する側の力量を高めることや指導する人員を多く確保することが大切になってきます。

○おわりに

四つの活動しかあげていませんが、その他の活動の中でもヒヤリハット体験（危険を感じた状況）があるはずです。

子どもたちが、安全に活動でき、よりよい体験活動とするために、指導者は安全に対する指導力を高める必要があります。また安全に配慮した指導を行うことで、子どもたち自身にも危険を感じる力が身についていくものと思います。

南但馬自然学校では、8月24日にリスクマネジメントや安全に対する内容を盛り込んだ「自然学校講座」を開講します。

是非、受講いただき、リスクを感じる力を高め、安全に対する視点を身につけていただきたいと思います。

参考：平成19・20年「研究紀要」指導補助員とリスクマネジメントに関する調査―自然学校指導者の「ヒヤリハット事例」における原因認知について

南但馬自然学校の調査研究委員会

プレ自然学校・ アフター自然学校って？

平成二十一年度の自然学校推進事業実施要項の改訂により、事前事後の体験活動を充実させることを条件に四泊五日以上の弾力的な自然学校が実施できるようになりました。

本校では、この要項の改訂を受け、同年より新たに事前・事後の体験活動を実施したいという小学校を受け入れる「プレ自然学校・アフター自然学校」事業を始めました。受け入れについては、小学校三年生で実施する環境体験事業の全校実施等を踏まえ、小学校一年生から六年生までを対象としました。

今年度実施された学校の事例を紹介します。

〈養父市立高柳小学校〉

①参加者

一年生、二年生、三年生の児童、

引率者（計四十九名）

②活動内容

〈サツマイモの苗の植え付け〉

トライやる・ウィークで、活動中の中学校二年生にも助けてもらいながら一緒に植え付けをする事ができました。マルチシートに開けられた穴の中に苗を斜めに挿すことを教わりながらあつという間に二〇〇本の苗を差し終えました。

〈自然散策〉

キャンプ場内を流れる佃川に入って、サワガニ等の水辺の生



き物を探したり、雨乃宮の池でたくさん生み付けられたモリアオガエルの卵を見たりしながら歓声を響かせていました。また、松ぼっくりやホウの葉等、自然物クラフトの材料も探しながら施設散策をしました。

〈朝来市立大蔵小学校〉

①参加者 四年生と担任、保護者（計七十二名）

②活動内容

《野外炊事》

野外炊事を通じて、五年生の自然学校に向けた事前体験活動としたいというねらいで計画されました。野外炊事のメニューは、子どもたちと一緒に人気のある「カレー」です。飯ごうや鍋を初めて使う子どもたちは、やや緊張した真剣な顔つきで、野外炊事の基礎・基本を学び、包丁の使い方や火傷に気をつけながら、カレーづくりに挑みました。ややお焦げのご飯もありましたが、保護者の協力のもと、カレーづくりの体験

〈自然物クラフト〉

集めた材料を元に一年生では貼ったり、二・三年生では動物や人の顔をイメージした作品に仕上げたりと、学年に応じた内容で工作に挑戦しました。

一日かけて南但馬自然学校でじっくりと過ごしました。天候にも恵まれ、それぞれの活動を通して初めて知ったこと、肌で感じた感触、どれも自然の中に身を投じることによって得られた貴重な体験となったようです。

活動を通して、仲間とのふれあいや助け合いを学びました。きつと、来年の自然学校に向けての自信となっていることでしょう。



プレ自然学校・アフター自然学校では、二校の取組事例以外に、「隠れ家づくり」「朝来山登山」「サイクリング」「テント泊」等の自然学校と同様に、様々な活動ができます。「プレ自然学校・アフター自然学校」事業が実施されることにより、自然学校事業がさらに広がりや深まりを増すことを期待して止みません。

本事業の詳しい内容は兵庫県立南但馬自然学校（指導課）まで
文責 兵庫県立南但馬自然学校 主任指導主事 中井 宏

南但馬自然学校
歳時記

田舎から都会へ

兵庫県立南但馬自然学校

技師 増田 克也

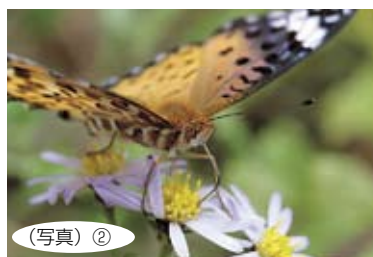


柔らかな光に包まれた昼下がりのこと、ツマグロヒヨウモンに出会いました。なんだか聞き慣れない難しそうな名前ですね。「名は体を表す」とはよく言ったもので「ツマグロ」前羽の先が黒く、ヒヨウモン「オレンジ色」の地に黒の豹紋がある蝶」と覚えてしまえば、次回出会ったときに首を傾げなくてすみそうです。



(写真①)

花の側に座り込み静かにしていると、警戒を解いてツマグロヒヨウモンの方からこちらに近寄って来ました。早速、気に入った花にとまると、内向きにクルリと卷いたストロウ状の口(写真①)を



(写真②)

研修会のお知らせ

自然学校講座
(指導者入門・指導補助員養成)

目的	自然学校の趣旨や指導者の役割を理解するとともに、指導補助員等としての基礎・技術を学ぶ。
期日	平成22年8月23日(月)～ 8月25日(水) 2泊3日
対象者	大学生、一般県民、公立学校教員 (高等学校10年経験者研修として受講可) 兵庫県立南但馬自然学校登録指導補助員、自然学校救急員
募集員	30名
経費	6,300円(全日程参加の場合)
申込方法	本校に電話連絡の上「自然学校講座申込書」(HPからダウンロード可能)にて、直接本校に申し込む。(FAX、Eメール可)
受講形態	全日程の受講を原則とするが、1日又は講座単位の受講も可能
研修内容	23日(月) 講義「兵庫県の自然学校について」 「体験活動と教育課程との関連について」 実習(自然体感型アクティビティ体験・問題解決型アクティビティ体験) 講義・演習「プログラムデザイン」 24日(火) 実習(クラフト指導の基礎基本) 講義・演習「自然学校・野外活動におけるリスクマネジメント」 実習(キャンプファイヤー指導の基礎基本) 演習(先輩に学ぶ) 25日(水) 実習(野外炊事指導の基礎基本) 振り返り



(写真③)

面から(写真④)見ると、「やっぱり蝶々も昆虫だ」と感じさせる迫力ある面構えです。驚いたことに眼までが神秘的な豹柄で、その上、触角の先端にもオレンジ色を配しているとは、ツマグロヒヨウモンは、いったいどこまでおしゃれなのでしょう。



(写真④)

ツマグロヒヨウモンの幼虫はスミレだけを食べて成長します。南但馬自然学校の周辺では野生のスミレが自生しているのですが、ツマグロヒヨウモンは普通に見られる蝶ですが、近年、よほどスミレなどに縁がなさそうな都市部でも、ツマグロヒヨウモンが見られると言うのです。その謎をひも解くと、このところのガーデニングブームで庭やプランターに植えられる、パンジーやビオラに代表される洋物のスミレをツマグロヒヨウモンはちゃっかり利用しているようです。本来、南方系の蝶ですからヒートアイランドも都会への進出に役買っているのでしょう。都市部にお住まいでパンジーなどが近くにある方は、黒地に赤のラインが入ったツマグロヒヨウモンの幼虫を探してみてもいかがでしょうか。

◆本校ホームページ「自然のページ」より抜粋、改稿
<http://www.shizengakko.jp/>